国際交流を通した教育効果の検証と二国間比較
－フィリピンの大学との国際共同研究－

髙橋大生*[1)], 有薗信一[1)], 金原一宏[1)], 俵祐一[1)], 矢部広樹[1)], 田中なつみ[1)], Mary Audrey D. Viloria[2)], Ryan Dean Sucgang[2)], 大城昌平[1)]

[1)]聖隷クリストファー大学, [2)]Mariano Marcos State University

【背景】

本学では、「国際的な保健医療福祉の課題解決」ができるグローバル人材の育成を目的とし、本学とフィリピンのマリアノ・マルコス州立大学（MMSU）の相互の教員が両大学の学生に講義を実施している。本調査では、海外の教員による単回の講義の教育効果について検証するとともに、日本とフィリピンの学生の教育効果の特徴を報告する。

【方法】

本調査はMMSUの理学療法学科1年生19名および本学理学療法学科1年生39名を対象とした。講義は各大学の教員1名により行われ、講義テーマは「がんのリハビリテーション」に関する内容を60分間実施した。講義前後の教育効果の判定に、それぞれの使用言語に合わせて日本語版BEVI-j、英語版BEVI-sを使用し、オンライン上で回答させた。BEVIは学生の情動的・心理的変化を客観的に評価するオンラインシステムである。さらに、カークパトリックの教育評価法のモデルを活用し、講義の満足度、わかりやすさ、興味・関心について5段階のリッカート尺度を用いて調査した。BEVIの回答結果はサーバー上のプログラムにより自動的に統計的処理がなされ、5点以上の差が有意と判断される。満足度の群間比較にはマンホイットニーのU検定を用いた。

【結果】

講義前後のBEVI尺度について、本学の学生では【意味の探求、社会文化的オープン性】に5点以上の向上がみられ、MMSUの学生では、【社会文化的オープン性、世界との共鳴】に5点以上の向上が認められた。満足度の比較においては2国間で有意な差は認められなかった。

【考察】

講義前後で、日本の学生は思索的思考を反映する意味の探求が向上した。MMSUの学生では世界との共鳴が向上しており、世界への関与を模索していることが考えられた。社会的オープン性は双方の学生に向上を認めた。海外の教員による講義を受講することで情動的・心理的変化に好ましい影響を与える可能性があることが明らかとなった。